

台湾の仏教

裴輪顯量

はじめに

台湾は身近にあるにも関わらず、その実際は余り知られていない地域ではないだろうか。歴史的にも古い時代のことは知られていないことが多い。実際、明朝の遺臣、鄭成功（一六二四—一六六二）が活躍して以降の台湾しか知らない、と言う方が多いのではないかと思う。確かに、歴史的にも鄭成功以降が比較的明らかである。あるいは、戦前の研究や文化人類学の研究が示すが如く、高砂族とかアミ族とか、山間部に居住する

少数民族の存在で台湾を考える人もあるかもしれない。

台湾もアジア諸国のご多分に漏れず、大航海時代以降、歴史の波に揉まれた地域であった。まずポルトガル人たちが海に浮かぶ美しい島を見て、フォルモサ（Formosa）と名前を付けたのに始まる。次に、オランダが澎湖諸島を占領する。明との交戦の結果、オランダは澎湖島からは撤退するが、台湾の南部、台南の地に拠点を築き、台湾の植民地化を推し進めた。またスペインも北部の基隆と淡水を占領し、植民地化を推し進めた。やがて北部を占領したスペインと、南部を占

領したオランダとが対峙する時期があったが、一六四二年、オランダがスペインを駆逐した。こうして、一時期とはいえ、台湾は完全にオランダの支配下に入った。

ところが、一六六一年、明朝の遺臣であった鄭成功がオランダ人を台湾から駆逐し、台湾は中国人の手中に戻るのである。しかし、鄭成功は若くして亡くなり、一六八四年、清朝は台湾をその版籍に収めてしまった。そして台湾を福建省に隷属させ、台南に台湾府を置いて、統治することになったのである。この頃からの歴史を今に伝えているのが、台湾南部に存在する歴史都市、台南市である。

さらに台湾は、日清戦争の後、下関条約によって清朝から割譲され、日本の植民地となった。いずれにしても、日本人にとって「近いがその歴史を余り知らない地域」、それが台湾なのではないだろうか。

さて、現在、台湾は仏教の大変に盛んな地となっている。昨今、台湾仏教（タイワン・ブッディズム）と固有名詞化されるほど活況を呈しているのであるが、その

歴史的な背景は意外と知られていないのが実状である。そこで本稿では、台湾の仏教について、その歴史的な展開を捉えながら、概略を記してみたい。

一 台湾の歴史と宗教

台湾の宗教を考える際には、その担い手が誰であるかをまず把握しなければならない。それは古代から台湾に居住する少数民族の宗教なのか、あるいは台湾に比較的早い時期にやって来た人々の宗教なのか、区別する必要があるように思われるからである。もともと実際には、台湾に居住する人々は、漢民族に属する人々が多数を占める。とすれば、大陸と同じように、漢民族の宗教という視点は変わらない。しかし、実際には、台湾の漢民族には、大きく分けて二つの区分が存在する。それは国民党軍の台湾への移住を一つの境とする。それ以前の人々を外省人と呼ぶのに対し、新たに移住してきた人々を外省人と呼ぶのである。もとも一九九〇年代以降は、台湾人との呼称も目立つようになり、大陸との溝を深めているようで、ま

た民族としての意識も芽生えていた。

本論では、しばらくは鄭成功以降、即ち十七世紀から日本が占領するまでの時期、次に日本が占領していた時期、次に外省人が移住してきて現在に至るまでの時期、の三期に分けて簡単に記述したい。

(一) 日本統治時代以前

まずは日本が占領する一八九五年までの状況を概観しよう。即ち、鄭成功の活躍した十七世紀の半ば頃から十九世紀の末期までの状況についてである。この頃には、すでに仏教も台湾に流入しているが、仏教以外の宗教も数多く存在していた。

台湾の宗教には、仏教、道教など様々なものが存在した。特に民間信仰として、次の三つの宗教が知名度も高い。

① 齋教 仏教の一派。菜食を中心とし長齋をする人もある。

② 鸞堂 道教の一派。「扶鸞」を中心にする。中国古老の道術の一種。

③ 一貫道 道教の一派。改革派と言われる。

齋教は菜食を中心とし、儒教、道教、仏教の混交したもので、禁酒・禁煙を奉じ、いわば修養を主とするものである。一日を限らず長期に渡って八齋戒を保つ人々も存在したという。但し厳密な出家主義は採用しなかったようで、出家の指導者を持たず、在家の立場で信仰を守っていたところから居士仏教または家庭仏教とも称されている。流派として三派が存在し、竜華派、金幢派、先天派の存在が知られている。なお、先天派は出家主義を採用し、出家仏教に近い形を取っている。

鸞堂は、神懸かり的な筆書き（扶鸞）を特徴とした信仰である。神霊が人により移り、筆を走らせる。その走り書きされた書を鸞書というが、その鸞書により宗教的・社会的な活動が展開されたとみえる。その一貫として鸞堂が建設されたり、神意によって人々を慰撫したり、薬を施して病気を治したり、と多彩な活動を展開したと考えられている。なかでも鸞書のために建設された鸞堂をもつて宗派の名前とされている。

一貫道も独自の信仰であり、道教の一派と位置づけられている。一貫道は、大陸の白蓮教の流れを汲むと言いい、先天道の改革派でもあると言われる。⁽¹⁾ 教義には仏教教理を多く吸収し、その主神である「無極老中」とともに釈尊も祀る一派である。その教義の特徴は、「唯一最高の天命によって、世界のすべての霊を極楽天国へ救いかえす使命をおびた宗教」⁽²⁾とされている。

以上の三つが、民間信仰として有名であった。⁽³⁾ では仏教の方は如何であったのだろうか。台湾への仏教の伝播がいつ頃であったのか、はっきりしたことはわからない。しかし、福建省等の台湾に近い大陸の諸州から人々の移動が存在したことを考えれば、仏教も彼らの移動に伴い、台湾に入っていたことはまず間違いない。実際、中国の歴史書の中では、『三国志』に「夷州」として名前が見え、隋代の頃から多くの人々の移住が始まったとされているから、その頃から仏教もまた仏寺も存在したと考えたいところである。しかし、残念ながら、台湾においては、さほど古い寺院は知られていない。

十七世紀または十八世紀になってしまふのであるが、その中でも、早くから存在した寺院として有名なものは、台北における龍山寺であろうか。この龍山寺は清朝の乾隆三年（一七三八）に創建され、観音信仰を中心の人々が集まったところである。⁽⁴⁾ 現在まで、その信仰は受け継がれ、多くの人々が参詣する寺院となっている。ちなみに、この龍山寺は、泉州（現在の福建省福州市）安海の龍山寺から分祀されたものと言われ、台南、鳳山、鹿港、淡水に同名の寺院がある。

その他、比較的早くに創建された寺院として、台南市内に存在する開元寺が挙げられる。この寺院は、鄭成功の息子の鄭經によってその前身が作られたと言われ、一六九〇年には改建されており、寺院であったことが知られている。また台北縣中和郷の慈雲寺も十九世紀ではあるが、一八五一年の創建にかかるもので古い方である。⁽⁵⁾

(二) 日本統治時代（一八九五—一九四五）の四大門派
一八九四年、朝鮮半島の権益を巡り日清間に戦争が

勃発したが、その後の下関条約で、台湾は日本に割譲され、日本の植民地となった。日本が占領していた時代の、台湾の仏教の状況はどうであったのだろうか。

まず、その特徴の一つは、日本の仏教諸宗の進出が見られることである。特に、日本曹洞宗と日本臨済宗の進出が目される。日本統治時代の仏教は、主に次の四つの流派に分かれるという。

①月眉山派（基隆月眉山靈泉寺一九〇三年開創・日本曹洞宗）

②凌雲寺派（台北淡水觀音凌雲山寺一九〇九年開創・日本臨済宗）

③法雲寺派（苗栗大湖法雲寺 覺力法師一八八一年生まれ、一九三二年没。大陸鼓山湧泉寺より）

④大崗山派（高雄大崗山超峰寺一六七三年開創）

このうち、①の月眉山派の靈泉寺は、台湾にもともと存在した齋教の拠点でもあった寺院であり、日本の曹洞宗が齋教を手がかりに、台湾に地歩を築こうとしたことが知られる。②の凌雲寺も日本との関係を有する寺院であり、全面的な出家主義をとった寺院ではな

かったとされる。これに対して、出家主義を主張し、中国大陸からの禪風を眼目に、台湾の仏教界に新風を巻き起こしたものが③の法雲寺派であったという。

そこで、まず大陸の鼓山から概略を説明しておこう。鼓山は、中国の禪宗の中でも有名な山であり、福建省に存在する。唐の会昌の破仏の法難で荒廃するが、後梁の時に再興された。明初にも再び修復され、永樂五年に湧泉寺と改称され、神晏、元賢、道需、等の禪者が輩出された地である。

このように、台湾の仏教を考える際には、大陸の仏教との関連を考慮する必要がある。そして、その傾向は、現在の台湾仏教の傾向にも大きな影響を与えている。特に文化活動を積極的に取り入れているところなどは、大陸の仏教界の近代の動向から連続するものではないかと考えられる。

そこで、若干大陸の近代における仏教界の動向にも触れておこう。

清朝末期の仏教界の改革運動は、楊仁川居士の仏典の刻経活動に始まる。太平天国の乱で荒廃した南京の

町で、清朝政府は、文教政策を進める。その一連の経過と関連すると考えられているが、清朝の外交官であった楊仁川居士によって、南京に金陵刻経処が開設されたのである。こうして、仏典の刻経作業が続けられていくのであるが、この作業は、今現在も続けられている。

中国仏教界の改革運動は、続く太虚（一八九〇—一九四七）に継承されてゆく。彼は寺産管理など民主的な寺院の管理を主張したが、しかし、彼の主張した改革は、結局はあまり大きな成果を上げることが出来なかった。その理由は、すでに既得権益と化していたものを変革することができなかったからであるという。

また、伝統的な仏教を継承する僧侶もあった。その代表が虚雲（一八四〇—一九五九）である。虚雲は百二十歳の齢を保ったといわれるが、おそらく清朝の後半を飾る代表的な仏教者の一人であろう。そして、彼の下にも次代を担う僧侶が輩出していったのである。

概して日本統治時代は、日本の既成仏教が進出し、在俗的な仏教を広めたのに対し、③、④の中国人たち

の派が出家主義を標榜し対峙していた時代と言えるのではないだろうか。

（三）台湾仏教隆盛の時期

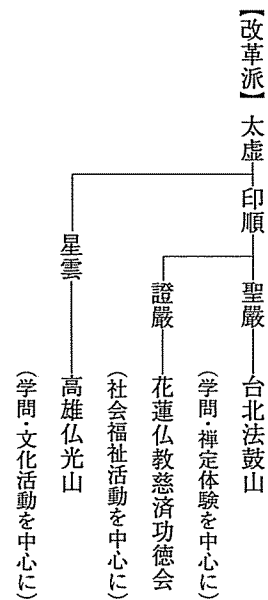
次に、大東亜戦争後、日本の植民地という状態から脱し、かつ大陸から国民党軍が移住してきてから以降の、仏教の特徴について記そう。

まず、現在の台湾仏教の直接の契機を築いた僧侶たちが、国民党の台湾への移住に伴ってやって来ていることが、その第一の特徴として挙げられる。しかし、注目される大きなうねりとしての興隆は、一九八〇年代以降におきていることであろう。一九四九年、中華民国が台北に建設されてから、長らく戒嚴令が発令されたままになっていたのであるが、それが一九八七年七月十四日、正式に解除された。電子部品を中心とした台湾の経済発展も、ほぼ一九八〇年代から顕著になっている。これらの経済的繁栄と期を一にして、仏教教団も隆盛の時期を迎えているのである。このような見方を許していただけとすれば、わずかここ二十年

程度の短い期間に、大変な繁栄をもたらしたと言うことができる。

現在の台湾には、幾つかの注目すべき門侶集団が存在している。なかでも四つが有力で、そのどれもが現在ではかなりの認知度を得ており、台湾の仏教界を代表する四天王的存在になっているように感じられる。現在の知名度及びその信者数から判断したものであるが、その四つとは、列挙すれば、以下のようになる。台北を拠点とする法鼓山、高雄を拠点とする仏光山、花蓮を拠点とする慈濟功德会、埔里を拠点とする中台禪寺である。これらの四つの流派は、それぞれ宗教的エリートとも呼べるような僧侶によって指導されている。またこれらは、改革派と伝統派に分かれるようである。

さて、それでは、各門侶集団の指導者の法系を次に示そう。まず改革派と思われる集団である。図示すれば次のようになる。



右の図でも明らかなように、太虚の影響を受けた印順法師（一九〇五—現在）が、台湾の仏教界にも大きな影響を与えている。なお、印順法師は現在（一九九九年時点）九十五才に達する高齢であるが、今なお健在であるという。印順法師は、日本の大正大学から文学博士の学位を受けていることでも知られる。

一方、伝統派と目されるグループも大きなものが一つ存在する。



中国仏教における禪の拠点としては、古より江西省の雲居山真如禪寺や浙江省の高旻寺などが著名であった。江西省は農村部であり、かの有名な百丈懷海が生まれた地でもある。古来、中国禪の故郷として重要であつたが、清朝の最晩年を飾る仏教者として位置づけることができる虚雲禪師も、この江南地方を中心に活躍している。虚雲禪師は、高旻寺において大悟を得たと言われ、禪寺の復興に尽力した人物であるといわれる。最後の復興地が、江西省の雲居山真如禪寺である。この虚雲禪師のもとに多くの弟子が参集し、伝統的禪風を鼓吹したのである。改革派に属する太虚法師も、もとは虚雲禪師のもとで修行していた時代があるという。また惟覺禪師の師にあたる靈源法師（一九〇二—一九八八）もその弟子の一人であるといわれる。この惟覺禪師が、現在、埔里の地を中心とする中台禪寺の指導者である。またその法系は、臨済禪に属するとされる。

なお、太虚は、師匠の虚雲禪師を政治的に批判し、独自の活動へと邁進し、改革運動を興すことになったと言われる。また改革運動への準備をした人物に、楊

仁川居士の刻経活動が存在したと位置づけられる。なお楊氏と日本の南条文雄の間に交流があり、日本から古い仏典が送られ、復刻されたことは注目すべきことであろう。

太虚の提唱した仏教改革運動は、そのスローガンとされる「人間仏教」・「人生仏教」に端的に現れている。人々の間で人間のために貢献する仏教でなければならぬという点に、その特徴を見て取ることができるが、この運動方針は、中華人民共和国が成立した後、中国仏教会会長となった趙撲初居士もスローガンとして採用したことで、多くの人に知られるところとなった。

なお、蛇足であるが、中国の仏教界には今でも法師・禪師・律師の区別が存在するようであり、注意が必要である。

それでは、最後にそれぞれの門侶集団について、簡単に触れておこう。

二 台湾仏教の四天王

四つの門侶集団について実際に簡単な訪問調査（単に

訪問しただけの所もある)をおこなったが、その調査から得られたことを記そう。なお、私の思い違いもあるかも知れない。ご寛恕を願えれば幸いである。

(一) 慈済功德会

慈済功德会は、現在、台湾の仏教を象徴する、その代表格であろう。指導者は證嚴法師であり、尼僧である。證嚴法師は、若くして養父を失い、中華民國五二(一九六三)年五月、花蓮の普明寺に入り、最初は『法華經』を礼拝し、『法華經』の教義を研究したという。證嚴法師は、印順法師に師事したことがあり、その標語の一つである「予約人間浄土」との言葉には、大陸の改革派の影響を見ることが可能である。実際、台北で受戒した折りに、『太虚大師全書』に触れ、また印順法師より法名を「證嚴」字を「慧璋」と賜っている。

十名にも満たない、わずか数名の同志の方たちと貧しい人々の救済活動を開始したが、現在では台湾で、もつとも会員数を有する団体に成長している。李登輝總統(平成十一年十二月現在)も会員の一人といわれ、社

会的認知度は一番高い。実際に台湾を旅してみても、その評判の頗る良いことに驚かされる。その始まりは、救済活動にあったが、貧窮の根元に病気のあることを痛感し、やがて救済活動は医療活動へと新たな発展を遂げる。こうして、中華民國七五(一九八六)年八月に「仏教慈済総合医院」が花蓮に誕生する。現在では、医療福祉活動にも従事し、その拠点である花蓮に、中華民國七八(一九八九)年には看護学校(仏教慈済護理専科学校)も設立され、その後の八三(一九九四)年には医師養成のため「慈済医学院」という教育機関をも開設した。

現在、在家の会員数最大の教団である。證嚴法師は、通常は花蓮の静思精舎に住しているが、実際には各地を訪れており、花蓮で会うことはなかなか難しいようである。

慈済功德会の活動は、慈善・医療・教育・文化の四大事業に集約され、それぞれの部門で大きな足跡を残している。

慈済功德会においては、出家は大変に厳しく「出家、

乃大丈夫之事也」とあるごとく、「個人の安樂のためではなく、衆生が苦を離れることを望む人間でなければならぬ」として、成立から二十二年の間に出家が許された人はわずかに十五人であったという。

また戒律の上でも興味深いのがみえる。在家者のために十善戒を説くのであるが、通常の十善戒は、不殺生・不偷盜・不邪淫・不妄語・不悪口・不両舌・不綺語・不貪欲・不瞋恚・不邪見であるが、慈済功德会の説く十善戒には、新たに「ビンロウヤシを食べない」というものが加わっている。台湾の風俗を反映したものが取り込まれており、戒律の實際を考える際に、誠に興味深い。

(二) 仏光山

次に仏光山について概略を記そう。仏光山は、台湾の南部、高雄の郊外に拠点をおいた門侶集団である。その指導者は星雲法師(一九二七—現在)である。星雲法師は、中華民國三八(一九四九)年、国民党軍とともに台湾に逃れてきた一人の僧侶であった。仏光山の

創建は中華民國五六(一九六七)年に始まる。荒れ果てた竹林を開墾し、寺院を造り、自己の構想に基づいて堂宇を建設していったという。これが現在の高雄郊外の仏光山である。建設計画は、五年ずつの四期に分けられ、東方仏教学院、大悲殿等の建設から始められ、第二期には大悲育幼院等が、第三期には大雄宝殿、普門中学等が、そして最後の第四期には、地藏殿、信徒会員服務中心などが建設された。

これらを見てみると、星雲法師は、仏教信仰に基づいた教育活動・文化活動・観光活動などの諸方面に力を尽くしたと言えようか。特に教育活動に力を注いだところに仏光山の成功の秘訣があったと言えるかも知れない。

現在、仏光山は、世界の六大州(アメリカ「ロサンゼルス」「ニューヨーク」・フランス「パリ」・タイ「バンコク」・フィリピン「マニラ」・イギリス「ロンドン」・オーストラリア「ブリスベン」等)に支部を持ち、百力所以上で道場を運営している。また仏光山出版社を持ち、雑誌『普門』を定期刊行し、図書館、九カ所の美術館、四カ所

の大学を持つ。また中学校、育幼院、安老院、雲水医療隊を運営する。仏教文化事業を大きく推し進め、仏教学院を一六カ所に興し、二千二百人以上の出家者を抱える大教団を形成している。

仏光山の活動は、まさしく仏教文化活動の実践にその特徴を見て取ることができる。これも直接には太虚に淵源するものであろう。

出版事業の面では、『仏光大藏経』を刊行している（この大藏経は、経論に句読点が附されている点で大変に便利である）。また、この大藏経の刊行に合わせて『仏光大辞典』なるものも出版された。現在では大藏経も辞書とともに電子仏典化され、公開されている。

なお、台北の仏光山の道場で気づいたことであるが、現在、出家僧侶の方たちは、仕事帰りのサラリーマンの老若男女の方々を対象に、仏教文化活動及び布教活動に熱心であった。そして、夕方から夜にかけてが、都市部における僧尼のもっとも活発な活動時間帯となっていたのである。南アジアから東アジアにかけて、伝統的僧侶は、午後食事をしないという非時食戒を守

っているのが通例であるが、台湾の台北においては、夕食をしつかりと採る生活に変化しているのであった。これも、現代の仏教が、人々の間で生き延びていくために変化したスタイルであるとして、積極的に評価されるべきものではないだろうか。また、ここでも多くの方々が尼僧であり、まさしく尼僧の活躍によって、台湾の仏教の隆盛が築かれているという感を強く受けた。おそらく現在、その会員数は、台湾で第一位、または第二位であろう。

(三) 法鼓山

次に、台北を拠点にして活躍する法鼓山について紹介しよう。

法鼓山は、聖嚴法師（一九三二—現在）によって指導されているグループである。聖嚴法師は、大陸で生まれ、一九九九年に古稀を記念する事業が計画されていた。十三歳で大陸の狼山広教寺に出家し、国民党軍とともに台湾に來島した。一九六〇年に、東初法師（一九〇七—一九七七）の下で再出家をした。また、その仏学

研究の途上で二年間の閉關（堂宇に籠もり仏学研究等に精進すること）を行い、仏教学の研究にも造詣が深い。日本にも留学の経験があり、立正大学に学び、同大学から文学博士の学位を取得している。こうして聖嚴法師は、台湾始まって以来、初めて外国の大学から学位を取得した出家者として注目された。法鼓山の僧侶の方たちは、仏教学研究にも熱心であり、研究機関として中華仏学研究所を持っている。この研究所においては、海外からの研究者も教員として関わっており、国際的な側面を有している。また、次世代を担うことを期待されている智慧敏法師も、日本の東京大学へ留学し、学位を取得した学僧である。彼は現在、台湾国立芸術学院の教員も務めている。

彼らの活動拠点は、台北の郊外、北投にある農禪寺である。農禪寺自体はさほど立派な寺院ではないが、坐禪の道場、出版物の販売所、聖嚴法師の簡単な生涯に関する事跡を紹介する記念館的な部屋、などが存在する。また、コンピュータを駆使して、仏典の電子テキストデータベース化も進められており、その拠点の

一つがこの農禪寺の内部にあった。ちなみにこの電子仏典の底本とされたものは日本の『大正新脩大藏経』であり、日本印度学仏教学会の電子仏典化の計画とも、交流を持ちながら仕事を進めている。

今、農禪寺は手狭になってしまい、郊外の台北縣金山郷三界村七樓十四、五號に新たな拠点を造りつつある。これが法鼓山と呼ばれることになる予定であるが、将来的に完成した暁には、仏教の研鑽と教育の場となるはずである。法鼓山内には、関房、女衆部寮房、禪修中心、接待大廳、第二演講廳兼齋堂などが建設される予定という。但し、一九九八年八月の時点では、寺院の設立は許可されていたが、國小（小学校）、國中（中学校）の許可はまだとのことであった。総合学園都市になるのは、もう少し先のことも知れない。

次に、法鼓山の方丈秘書の果光法師にインタビューしたことを元に、簡潔にその活動の内容を記しておくたい。

一九九八年八月現在で、法鼓山の僧尼は、百人前後とのことであった。男性の出家者はその内の約五分の

という。その内、七十人近くが農禪寺で活動に従事している。法鼓山では出家者はかなり厳格に考えられ、厳しい条件をクリアした人のみに許されるという。次に述べる中台禪寺が出家の功德を強調し、多くの出家者を抱えるのと大きく異なる。法鼓山は、世の中のリーダーになる人にとって仏教が必要なのだという認識を持っており、そのためにも出家者には厳しい条件を課しているようである。一年に十名程度の出家希望者があるのだそうだが、簡単には出家にはなれず、最低一年間は寺院の生活を体験しなければならぬ。この期間の見習い者を「行者」と呼ぶそうだ。「行者」には十戒の護持が求められる。一年後、大丈夫であれば、沙弥・沙弥尼になれる。沙弥・沙弥尼になってから一年経過して初めて、比丘・比丘尼になれる。このような厳しい見習い期間を設けたのは、聖嚴法師の方針とことであつた。

聖嚴法師は仏教学者でもあり、その研究著作の多いのには驚く。論文も含めて六十冊以上の著作が存在する。研究機関として創設された中華仏学研究所には、

多くのスタッフが存在するとともに、この研究所からは多くの叢書が刊行されている。『中華仏学研究所論叢』には十七冊以上が刊行され、『仏学入門』なる雑誌も発刊されている。

さて、法鼓山の活動の特徴は、文化活動と研究活動および仏教の実践活動に特徴が見て取れる。なかでも、禪定体験の実習において、台北の市民の生活行動の実際に合わせて独自のものが存在している点が注目される。禪定体験の実習は、一般には禪七（七日間の禪定実習）が一般的なのだが、法鼓山の場合には、短期のものを取り入れているのである。週末に開催される禪定実習に禅一（一日のもの）、または禅二（二日間に渡るもの）なるものが存在し、台北の忙しい人々にも参加できる機会を提供しているのである。つまり、禅一、禅二、禅三、禅七などの多様なものが存在する。また、禅七は、年に少なくとも四回以上が開催されている。禅七は、教員や学生のために行われることが多いというが、時には僧伽の構成員のためだけにも行われる。このような点は、古代インドの夏安居を想像させる。

会員数は台北を中心に三十万人以上と言われ、台湾を代表する仏教門侶集団の一つと言えよう。

(四) 中台禪寺

最後に、埔里に拠点を持つ中台禪寺について簡単に概観しよう。⁽⁹⁾その中心拠点は、南投縣埔里の中台禪寺であるが、台北縣万里郷靈泉禪寺も、その拠点の一つとされる。

中台禪寺は、惟覺禪師（一九二八―現在）に指導された門侶集団である。惟覺法師は靈源法師から受法し、靈源法師は虚雲法師から受法している。靈源法師は基隆の大覺禪寺の開山であるが、彼もまた大陸から台湾にやって来た人物である。

この集団は、禪七の実習に特徴を見て取れる。法系は、虚雲禪師の伝統を継承し、大陸の伝統的禪風を今に伝えている。禪七は、先にも述べた如く、一週間に渡る禪定の実習であるが、この禪定体験は、現在、対象者の職業に応じて区分されている。その種類は以下の通りである。

- ① 教授禪七（大学の教授を対象とする）
 - ② 大專学生禪七（大学や専門学校の学生を対象とする）
 - ③ 司法禪七（判事や検察官を対象とする）
 - ④ 福田禪七（一般の在家の衆を対象とする）
 - ⑤ 僧衆禪七（僧侶を対象とする）
- 対象者をそれぞれ区別して受け入れているところが中台禪寺の特徴である。禪定の内実は次の三つに分類される。

- ① 数息観
- ② 参話頭
- ③ 中道実相観

なお、この「禪七」は一九八九年より始修され、現在までに百回以上に及ぶという。一九八〇年代後半、「禪七」は台湾ではあまり行われていなかったのに、伝統的な禪定体験を実習できるという点に、中台禪寺の隆盛の主因があったと想像される。なお、当初の参加者はわずかに二十人であったという。現在の参加者は「大專学生禪七」で、約二百五十人から三百人に及ぶというので、わずか十年に満たないうちに、非常に隆盛

になったことが窺われる。初期には、惟覺法師がまず住持になった靈泉寺において、これらの「禪七」が行われていたが、九十人程度が実習できる最大の人数であったので、現在の埔里の地に中台禪寺を建立する運びになった。ちなみに、現在建設中の中台禪寺の主要伽藍は、千人以上の人間が「禪七」等の打坐を行える巨大な施設であるという。西暦二千年の完成を目指していたが、完成すればおそらく東洋一、巨大な寺院となるであろう、とのことであった。しかし、一九九九年九月の台湾大地震の震源地に近かったことを考えると、その後がどうなったか多少心配である。

また、主要な仏事として次のようなものがある。

- ① 禪七
年の終わりにから年始にかけて及び夏季（七月から八月）
農曆七月十五日
四月十五日から七月十五日
- ② 孟蘭盆会法会
農曆七月十五日
- ③ 結夏
四月十五日から七月十五日
- ④ 大蒙山法会
- ⑤ 無遮大会

右記は主要なもののみである。四番目の大蒙山法会

は、いわば死者や先祖、鬼神等への追善菩提供養に相当する。五番目の無遮大会は、日本の『日本書紀』等にも見える、誰でもその法会に参加することのできる、また供養として食事の供される法会である。これらが、中台禪寺の活動の主要なものであるということであった。

なお、中台禪寺の僧侶の中には、大陸の南部、楊州の著名な高旻寺に行き、禪を修習してきた者もいるという。また禪定を専門的に修するために、「閉関」と称し、堂宇にお籠もりする習慣が現在も残っている。

受戒に関しても独自に行っているようだ。それらは三壇大戒と在家・出家菩薩戒などである。それらは、①沙弥（沙弥尼）戒、②比丘（比丘尼）戒、③出家菩薩戒、④在家菩薩戒である。沙弥戒は十戒、比丘戒は二百五十戒、比丘尼戒は三百四十八戒であり、『四分律』を用いる。また出家の菩薩戒は、十重四十八輕戒を用い、『梵網經』が実質的に機能している。さらに在家菩薩戒には、六重二十八輕戒を用いるという。これらの根拠は『優婆塞戒經』にある。また、これらの受戒会

の開催される場所は、基隆の十方大覺禪寺であるという。現在では惟覺法師が住持を兼ねている。大覺禪寺が選ばれている理由は、惟覺法師が受戒している場所であることに基づくであろう。

中台禪寺は、現在拠点となりつつある埔里の中台禪寺を中心に、各地域に出先機關を持つている。日本風に言えば、本寺と末寺の關係に当たる。各地の出先機關は、都市部に多く開設され、一般の民衆を教化する最前線になっている。これらは「精舎」と呼ばれ、現在五十数箇所にも及ぶ。¹⁰つまり、中台禪寺の仏學院を中心に仏教學の研鑽を積み、また禪寺において禪定の修習に勤めた僧侶たちを、各地の最前線に派遣するという形式を取るのである。なお、中台禪寺は出家の功德を強調し、出家者を量産しているように見える。現在では一千人を越えると言ひ、出家前に弁護士や教員をし、社会的に高い地位にいた人々も多いという。そして、現代台湾らしく、その布教の最前線において活躍しているのが、インターネットであった。¹¹

三 台湾仏教の特徴

さて、台湾の現代の仏教の特徴を、思いつくままいくつか箇条書的に掲げて、終わりとしたい。

まず、その第一の特徴として挙げられるものは尼僧の活躍が華々しいことである。慈濟功德会の證嚴法師を始めとして、香光尼僧團の香光法師など、その指導者として活躍している女性も少なくない。ちなみに、現在、南アジア・東南アジアにおいては正式の尼僧は存在していない。実際、タイにおいては社会的要求があるにもかかわらず、正式の女性の出家者が存在していない。そこで、メーチーと呼ばれる女性の半出家者が代わりに存在している。一方、台湾では、正式の尼僧が輩出される道が開かれている。今では台湾の尼僧集団が母胎になり、女性の正式な出家者になるための道を作り出している。出家者の総数も、圧倒的に尼僧が多い。慈濟功德会においては殆どが女性であるし、また仏光山、法鼓山においても多くは尼僧が占め、おそらくは八割方に昇るのではないだろうか。女性の活

躍が目立つというのが、まず第一の特徴であるが、なぜ女性の出家者が多いのかは、また逆に調査しなければならぬ項目の一つである。

第二の特徴は、台湾の仏教の隆盛が、戒厳令が正式に解除されて以降、爆発的になされたということであろう。これは、台湾の経済的発展が著しくなった時期と呼応する。つまり、経済的余裕が仏教の繁栄をもたらしただという側面があるように思われる。確かに、仏光山は、多少早くから活動を大きく展開させていたが、法鼓山、中台禅寺等は、一九八〇年代以降がその隆盛の時期となっており、経済的発展と期を一にしているのである。

第三の特徴は、現在活気を呈している集団は、宗教的エリートと呼べるような、名実ともに立派な宗教者によって、現在、指導されていることであろう。慈濟功德会の證嚴法師、仏光山の星雲法師、法鼓山の聖嚴法師、中台禅寺の惟覺禪師等、その誰を挙げても資質の勝れた宗教者であるように感じられる。

第四の特徴として、その集団の内部において、衛星

ピンロウヤシを食べないなど、実際に対応した、現実的な戒律の運用が見て取れるのである。

おわりに

全くの私的な感想であるが、現在の台湾の仏教は、いわば日本の鎌倉時代のような状況であり、宗教的エリートが門侶集団を形成し、教線を拡大している感がある。現在、台湾の仏教活動はとても盛んであり、特に福祉活動に力を入れている仏教慈善会の活動が多くの人々の賛同を獲得している。證嚴法師は、台湾から初のノーベル平和賞候補に推された経緯を持ち、実際の福祉活動では、「学びと感謝」を標語にしている。

これらの台湾を代表する仏教教団が、今後とも良い意味での仏教の発信基地となつて、活躍されんことを願い、擲筆としたい。

〔参考文献〕

- 末本文美士・曹章棋共著『中国の現代仏教』（大蔵出版、一九九六年）東京。
- 江燦騰『台湾仏教百年史之研究 一八九五—一九九五』（南

型の組織が出来上がっていることである。たとえば、中台禅寺に一例を見ることが出来るが、本山と精舎と呼ばれる末寺のような組織が堅固に出来上がっている。ちなみに、これは、日本において中世から存在した、本末制度に近似しているように思われる。組織的な有り様に関する今後の調査が望まれる。

第五の特徴として、教育機構をその集団内部に持っていることである。仏光山、法鼓山に典型的に見て取ることが出来るが、仏教を研究・教育する機関が存在し、次なる世代の教育に、時間とお金をかけている点が見受けられる。また中壙等の地には専門の仏学院が存在している。後継者の育成には、かなり熱心であるとも言えよう。

第六の特徴として、多様性に富んだ内容を仏教者たちが提供していることが挙げられる。実際には、期間の異なった禅定実習、相手に応じた禅定実習、お茶やお花に始まる、文化活動などが行われている。また、台湾の現状に合わせて、戒律が柔軟に適應されていることも、多様性の中に含められよう。夕食を取ったり、

- 天書局、一九九六年）台北。
- 江燦騰『台湾当代仏教—仏光山・慈濟・法鼓山・中台山』（南天書局、一九九七年）台北。
- 王見川『台湾的齋教与齋堂』（南天書局、一九九六年）台北。
- 關正宗『台湾的仏教一百年』（東大圖書公司、一九九九年）台北。

注

- (1) 一貫道の研究に関し、淺居紀『明清時代民間宗教結社の研究』（研文出版、一九九〇年）がある。
- (2) 篠原壽雄『台湾における一貫道の思想と儀礼』（平川出版、一九九三年）一八八頁参照。本書は台湾の一貫道に対する纏まった研究書である。
- (3) 篠原壽雄『台湾における一貫道の思想と儀礼』（平川出版、一九九三年）参照。
- (4) 李乾朗『艋舺龍山寺』（雄獅美術、中華民國七八年）参照。
- (5) 邪福泉『台湾的仏教与仏寺』（台湾商務印書館、中華民國七〇年）参照。
- (6) 楊仁川居士の研究は、陳維東氏の研究が詳しい。同氏「楊仁川撰『觀無量壽経略論』の浄土思想」（インド哲学仏教学研究 四、東京大学文学部印度哲学科、一九九六年）など。
- (7) 岑学呂編・慧光・大島龍玄訳『虚雲和尚伝—中国禪

仏教の最高峰・百二十歳の生涯」(葦書房、一九九六年)参照。

(8) 『心蓮萬慈—慈濟影像三十年—』(仏教慈濟慈善事業基金会、中華民國八六年)参照。

(9) 拙論「台湾現代仏教事情—中台禪寺を中心に—」(『人間文化』一四、愛知学院大学人間文化研究所紀要、平成一二年)参照。

(10) 「埔里中台禪寺・万里靈泉寺・基隆十方大覺禪寺及精舍聯絡地址—電話表」参照。

(11) 中台禪寺のホームページ (<http://www.ctworld.org.tw>) 及び <http://www.chungtaio.org.tw>。

(みのわけんりょう／愛知学院大学助教授)

(本稿は一九九九年十一月一日に行われた、当研究所主催の公開講演会における講演内容に、加筆していただいたものです。)